

ニューヨーク。
奥田佳奈子さんより

昨年12月、ニューヨークの奥田佳奈子さんから、本誌編集部あてにエア・メールが届きました。4月にブルックリン・ボタニカル・ガーデンで開かれた、サチヨ・イトー・カンパニー舞踊公演についての紹介の手紙です。以下、そのまま掲載させて戴きます。

(編集部)

編集長殿

4月25・26の両日、ブルックリン・ボタニカル・ガーデン(ブルックリン植物園)で、アメリカ合衆国、ニューヨーク市恒例の「さくら祭り」が催され、両日、数々のイベントが繰り広げられました。その中で、サチヨ・イトー・カンパニーが11年目の公演を開き、今回は特に初の野外公演となり、例年になく寒さと雨のばらつく曇り空のもとで、舞いが披露されました。

演目は、先ず『花の三番叟』で集まる人々を祝福し、次の沖繩舞踊『四つ竹踊り』では真紅の花笠を被ってとても艶やかに舞われました。続く『三ツ面子守』は、集まった観衆をユーモラスなストーリーで笑わせ、寒さを少し和らげた様でした。次は「さくら祭り」にはなくてはならない出し物の「さくら」で、箏曲を使って桜の枝、扇子の小道具を華麗に扱い、イベントの気分を盛り立たせました。そして、宮城道雄の名曲『春の海』を新舞踊的に振り付けた作品では、かもめが春の海の上空を舞うかのように飛ぶ様を表わし、新春の再生、復活、生命の息吹を感じさせた作品でした。最後にカンパニー全員による『中野ばやし』で、これは「姫神」による同名曲に観客参加を意図して振り付けられました。

前半は綾竹を使っての踊りで、後半はシンブルな三つの振りを繰り返すフォークダンスのようなステップで、歩き始めたばかりと思われる幼児から、子供達、老若男女までが、あつという間に舞台上に輪を描き、それは人種を越えた人と人の「輪」、「和」を思わせ、人々の感動を誘いました。

人種偏見の深く根ざす暴行が相次ぐ昨今のニューヨークで、舞踊を通じてそのへたたりを越えた心の交流、「輪」が出来たのは、私の心に何か温かいものを感じさせてくれました。

ちなみに、ガーデン内にある日本庭園のしだれ桜は、ちょうど満開、池の面にやさしくうなだれた姿は踊りの輪と共に、美しく心に残りました。

1992年6月